

5. 河川保護水面調査

I 調査目的

人為的保護施策によるサクラマス資源の増強と適正管理によって地先海面におけるサクラマス漁業の継続的發展を図る。

II 調査内容

1. 調査河川 老部川（下北郡東通村白糠）
吾妻川（西津軽郡深浦町）
2. 調査期間 昭和53年4月～54年3月
3. 調査担当者 青森県水産試験場
淡水養殖部長 長 峰 良 典
技 師 林 義 孝
技 師 長 津 秀 二
4. 調査項目
 - (1) 河川環境
 - (2) ヤマメの成長状況
 - (3) ヤマメの摂餌状況
 - (4) ヤマメの性状状況
 - (5) サクラマスのそ上・産卵状況
 - (6) 地先海面におけるサクラマス再生産状況
 - (7) イワナの生態（老部川のみ）



第1図 調査河川位置

Ⅲ 調 査 結 果

老 部 川

老部川は全長10kmあまりのＢＣ域（下流域）をもたない山間小溪流河川で保護水面はその支流の
"中の又沢、に設定されている。（中の又沢支流のスモモ沢と北の又沢は除く。）

1. 河 川 環 境

水質条件は下表のとおり４回調査を実施したが、第１表および第２表に示したように各項目とも
水産環境水質基準を十分満たしており、清浄な状態が保たれていた。その他、河川および河川周辺

第１表 水 質 分 析 結 果

採水場所	採水月日・時間	天候	気温 ℃	水温 ℃	pH	透視度 (cm)	DO ppm	DO %	BOD ppm	SS ppm
老 部 橋 下	53. 5. 18 8:20	f c	13. 8	11. 2	7. 2	30以上	11. 12	104. 7	0. 23	0. 34
	53. 7. 19 10:20	c	22. 3	19. 0	6. 9	"	9. 38	104. 1	0. 09	0. 84
	53. 9. 12 9:47	d	18. 8	16. 6	—	"	9. 43	99. 8	0. 39	0. 51
	54. 2. 2 8:05	s	1. 1	3. 2	6. 7	"	12. 86	99. 1	0. 66	1. 41
合 流 点 下 流	53. 5. 18 8:32	f c	13. 8	11. 8	7. 3	30以上	10. 78	102. 9	0. 26	0. 18
	53. 7. 19 10:10	c	22. 0	19. 6	7. 2	"	9. 11	102. 2	0. 04	0. 48
	53. 9. 12 10:02	d	18. 1	16. 7	—	"	9. 16	97. 1	0. 36	0. 48
	54. 2. 2 7:50	s	1. 5	3. 7	6. 9	"	13. 00	101. 5	0. 57	0. 63
ふ 化 場 下	53. 5. 18 8:45	f c	12. 8	11. 9	7. 2	30以上	10. 52	100. 7	0. 12	0. 33
	53. 7. 19 9:57	c	23. 1	18. 6	7. 2	"	9. 13	100. 6	0. 03	0. 32
	53. 9. 12 10:13	o	18. 5	14. 5	—	"	10. 16	102. 9	0. 51	0. 42
	54. 2. 2 7:35	s	1. 9	4. 4	7. 0	"	13. 27	105. 6	0. 85	0. 82
中 ノ 又 滝 下	53. 5. 18 8:55	f c	11. 8	11. 9	7. 2	30以上	10. 69	102. 3	0. 12	0. 15
	53. 7. 19 9:45	c	22. 5	18. 4	7. 0	"	9. 20	100. 9	0. 05	0. 52
	53. 9. 12 10:30	o	17. 8	17. 8	—	"	10. 02	101. 5	0. 25	0. 46
	54. 2. 2	s	(降雪のため採水不能)							

第２表 重金属分析結果（53年5月18日採水）

（単位：ppm）

採 水 場 所	C u	C d	F e	M n	P b	H g	Z n
老 部 橋 下	0. 003	N D	0. 18	N D	N D	N D	0. 01
合 流 点	0. 004	N D	0. 11	N D	N D	N D	0. 01
ふ 化 場 下	0. 003	N D	0. 05	N D	N D	N D	0. 01
中 ノ 又 滝 下	0. 002	N D	0. 07	N D	N D	N D	0. 01

の環境は、本年は7・8月の高温・少雨・多照という条件下が特徴であった。

流下昆虫、底生生物調査結果は第3・4表に示した。流下昆虫は蜉蝣目・毛翅目・双翅目が各地点で採集された。端脚目は5月17日の調査でふ化場下でのみ採集された。

底生生物は、蜉蝣目・毛翅目・双翅目が多く出現している。現存量をみた場合、藤曲り・ふ化場下の両地点が多く、全長数10mmのトビケラがよく出現していた。また、ふ化場下においては端脚類が比較的多いのが特徴である。毛翅目については、5月の調査時に、巣が各地点で多くみられ、河川内の石は巣で覆われているというような状況であった。

流量量については3回調査を実施した。（場所：中ノ又沢）5月0.27トン／秒，7月0.21トン／秒，9月0.23トン／秒で9月は昨年より流量の減少が目立った。

第3表 流下昆虫調査結果

場 所	月 日	蜉蝣目	襁翅目	毛翅目	双翅目	端脚目	陸 生 虫	その他	総 体 個 数	湿重量
合 流 点	5. 17	個	個	個 3	個 4	個	個	個	個 7	0.009 ^g
ふ 化 場 下	5. 17	2				7			9	0.004
	7. 17	1		3	1		1		6	0.004
	9. 11	7		9	1				17	0.093
藤 曲 り	5. 17	1			1				2	0.001
	7. 17	3			1				4	0.003
第 一 橋	5. 17	2		1	2				5	0.013
	7. 17	1			2		1		4	0.002
	9. 11	7	1	11			1		19	0.041

（サーバーネット 25 × 25 cm 3 分間）

第4表 底生生物調査結果

場 所	月 日	蜉蝣目	襁翅目	毛翅目	双翅目	端脚目	その他	総 体 個 数	湿重量	備 考
合 流 点	5. 17	個 40	個 4	個 5	個 19	個 3	個 31	個 102	0.560 ^g	保護水面内
	7. 17	35		79		6	8	128	0.825	
ふ 化 場 下	5. 17	69	2	19	16	10	26	142	2.362	
	7. 17	71	3	35	4	13	13	139	0.975	
	9. 11	22	1	37	6	1	27	94	0.209	
藤 曲 り	5. 17	81	3	17	14	9	26	150	2.455	
	7. 17	101	4	14	8	4	12	143	0.975	
第 一 橋	5. 17	75	2	27	4		8	116	0.850	
	7. 17	79	2	33	10		5	129	0.443	
	9. 11	25	3	35	8	1	8	80	0.055	

（サーバーネット 25 × 25 cm 1 回当り）

2. ヤマメの成長

昨年と同じく、7月と9月における0オヤマメの体長を調べた。7月18日は平均体長6.65 cm (5.6～8.4 cm)、平均体重5.38 g (3.22～10.89 g)、9月12日は平均体長7.23 cm (5.7～9.0 cm)、平均体重6.73 g (3.24～13.99 g)で、昨年と同じ様な大きさであり、0オヤマメの小型傾向がつづいている。(第5表)

また、他河川のものとの比較するため7月17日に小老部川の0オヤマメの魚体調査を行ったところ平均体長7.29 cm (6.1～10.8 cm)、平均体重6.53 g (3.74～21.55 g)で、老部川のヤマメは小型であることがわかる。なお、小老部川におけるヤマメはサクラマス天然産卵・ふ化によるものである。

老部川におけるヤマメの小型化傾向に対し、人為的に餌料条件を十分な状態にしたとき、どのような成長を示すかという天然水域との比較及び秋季におけるギンケヤマメの出現体長を確認する目的から老部川内水漁協養魚池内で52年秋、人工採卵した稚魚を53年12月12日まで飼育した。

(飼育尾数約300尾)

成長比較の目的は、飼育ヤマメの成育状況が12月12日に平均体長10.13 cmと天然域のものと大差なく、当初の目的を達することが出来なかったが、この時点で体長12.0 cmで完全にスモルトに変態したヤマメの出現をみた。(実際の出現時期は12月12日の調査日よりもう少し早いものと思われる。)

第5表 0オヤマメ年別成長(7月)

年	天然産卵床数	推定産着卵数	7月平均体長(範囲)	標本数	採捕月日
昭38	112床	23万粒	9.0 (8.6～10.4)cm	3尾	
39	57	13	8.6 (6.9～10.4)	24	
40	147	35	8.9 (7.4～10.7)	6	
41	190	45	7.6 (6.2～8.8)	17	
42	149	35	6.74 (4.7～8.6)	23	7. 27
43	192	50	7.4 (5.8～9.0)	21	7. 30
44	99	33	7.71 (6.7～9.6)	10	7. 11
45	88	31	7.28 (5.0～10.7)	64	7. 24
46	104	38	6.8 (5.2～8.2)	29	7. 2
47	81	24	8.25 (7.2～10.0)	35	7. 30
48	125	48	7.71 (5.7～8.3)	58	7. 27
49	71	21	7.0 (5.0～8.3)	31	7. 10
50	51	15	6.82 (5.2～9.3)	10	7. 11
51	154	45	7.02 (5.9～9.3)	29	7. 16
52	(80)	22	6.7 (4.9～9.2)	66	7. 29
53	1	0.25	6.65 (5.6～8.4)	35	7. 18

3. ヤマメの性状

ヤマメの性状については、各年次、特に昭和38年の報告によって明らかにされているので、その要点のみを述べると、外部形態では、背鰭条数 12～13 軟条、胸鰭条数 12～14 軟条、腹鰭条数 9 軟条、尻鰭条数 12～14 軟条、パールマーク 8～10個、側線鱗数 118～134 枚、鰓条骨数11条、内部形態では鰓耙数 16～18 本、幽門数 39～47 などとなっている。

また、ギンケヤマメ（スモルト・降海型）は3～5月に出現する。

4. サクラマス・産卵

老部川におけるサケ属の溯上期はカラフトマスが早く（例年ほぼ7月）サクラマス・サケの順である。

サクラマスについて溯上の一般的傾向を述べれば、8月上旬に溯上をはじめ、盛期は8月下旬～9月上旬で、産卵は9月下旬にはじまり10月中旬が盛期である。

53年度に老部川に溯上したサクラマス親魚は非常に少なく人工採卵のための採捕尾数は雌2尾（7月20日、9月5日各1尾）だけで、天然産卵床も河口から700 m程上流付近に1床確認されただけであった。（第6表）

この溯上数の減少要因については、昭和50年級群が3年魚としてかなり沿岸で漁獲されており、河川溯上群に対する漁獲強度が強く働いたのではないと思われる。（50年の場合、3年魚だけでの再生産効率が297尾となる。）また、溯上期における河川水量の減少等が加味されたものと思われるが今後の調査により明らかにしていきたい。

なお、サケは10月5日頃から河川溯上がみられ、雌86尾、雄62尾、計148尾を採捕し、33万粒採卵した。

第6表 サクラマス人工採卵実績

年	採 捕 尾 数			雌親魚使用数	人 工 採 卵 数
	雌	雄	合 計		
昭 43	尾	尾	尾	11 尾	19,618 粒
44	17	0	17	17	56,840
45	39	6	45	32	112,000
46	58	6	64	38	139,567
47	97	13	110	81	241,704
48	208	28	236	85	325,362
49	75	15	90	47	136,676
50	65	20	85	34	99,450
51	148	16	164	105	304,815
52	105	16	121	87	237,000
53	2	0	2	1	2,500

6. 地先海面におけるサクラマス再生産状況

第 7 表 老部川地先（白糠）のサクラマス再生産状況

	沿 岸 A 漁獲尾数 (尾)	B 溯上尾数 (尾)	年 別 C 資 源 量 (尾)	D 年・級別資源量 (尾)			年級別 E 総 資 源 量	再 生 F 産 率
				3 年 魚	4 年 魚	5 年 魚		
昭 38	12, 270	112	12, 382	11, 144	1, 238	0	13, 331	119
39	9, 326	57	9, 383	8, 633	750	0	19, 222	337
40	23, 488	147	23, 635	22, 453	1, 182	0	23, 793	162
41	11, 302	190	11, 492	11, 216	276	0	28, 818	152
42	18, 860	161	18, 521	16, 669	1, 852	0	25, 303	157
43	16, 109	209	16, 318	14, 685	1, 370	263	25, 385	121
44	28, 719	136	28, 855	20, 025	7, 647	1, 183	41, 648	306
45	29, 571	131	29, 702	19, 963	8, 278	1, 461	33, 829	258
46	25, 591	162	25, 753	21, 375	3, 863	515	28, 877	178
47	34, 166	190	34, 356	29, 959	2, 920	1, 477	27, 602	145
48	32, 249	257	32, 506	24, 187	7, 229	1, 090	28, 285	110
49	33, 375	157	33, 532	21, 796	7, 276	4, 460		
50	31, 474	110	31, 584	22, 917	6, 301	2, 366		
51	23, 647	282	23, 929	19, 562	3, 587	780		
52	57, 564	(201)	57, 765	47, 945	8, 723	1, 098		
53	34, 962	(3)	34, 965	32, 633	2, 332	0		

C : A + B

E : 同一発生群の合計

D : Cを年令別に区分

F : E / B

老部川と地元海面（白糠沿岸）とは 1 つのサクラマス生態系とみなすことが出来、その再生産状況は第 7 表のとおりで昭和 48 年の再生産率は 110 である。このことは、昭和 48 年に老部川に溯上したサクラマス親魚 1 尾が次代に 110 尾のサクラマスを生産したものと推定できる。

なお、第 7 表の年級別資源量（D）は第 3 図の検鱗による年令組成によって区分したものである。地元海面におけるサクラマス漁獲量は昭和 53 年（1 月～ 5 月）45.1 トンであった。

昭和 38 年の 9.47 トンから昭和 52 年の 73.68 トンまで年による変動はあるものの安定増加の傾向がつづいている。

吾 妻 川

吾妻川は全長12kmあまりの下流域をもたない山間小溪流で、保護水面はその支流の東又沢の一部（東又沢と南又沢との合流点から上流の第1号堰堤までの東又沢の本支流）に設定されている。

1. 河 川 環 境

水質条件について第8～9表のとおり4定点において4回調査を実施した。最下流の吾妻橋下において5月と7月に多少、河川の増水による濁りが認められたが、各項目とも充分水産環境水質基準を満足しており清浄な状態であった。（重金属は1回だけ実施。）

第8表 水 質 分 析 結 果 表

採水場所	採水月日・時間	天候	気温 ℃	水温 ℃	pH	透視度 cm	DO ppm	DO %	BOD ppm	SS ppm
吾妻橋下	53. 5. 11 10:18	b c	17. 2	13. 1	7. 2	30以上	12. 97	127. 5	1. 16	3. 13
	53. 7. 13 10:00	r	26. 2	22. 5	6. 8	〃	8. 64	102. 1	0. 57	2. 44
	53. 9. 22 10:30	b c	23. 5	17. 3	—	〃	9. 82	105. 5	0. 33	0. 36
	54. 1. 12 11:00	c	—2. 1	0. 2	—	〃	15. 02	106. 7	0. 23	0. 32
二又	53. 5. 11 10:54	b c	18. 1	13. 0	7. 3	30以上	12. 30	120. 6	0. 05	0. 93
	53. 7. 13 10:40	d	24. 5	21. 4	6. 9	〃	8. 97	109. 7	0. 30	1. 16
	53. 9. 22 11:00	b c	24. 0	15. 9	—	〃	10. 00	104. 4	0. 31	0. 07
	54. 1. 12 11:10	c	—2. 0	0. 2	—	〃	14. 78	105. 0	0. 33	0. 29
大林寺	53. 5. 11 13:30	b c	17. 8	13. 2	7. 4	30以上	11. 92	114. 8	0. 35	0. 78
	53. 7. 13 13:40	o	30. 4	20. 6	6. 7	〃	9. 03	103. 2	0. 07	0. 78
	53. 9. 22 11:40	b c	22. 8	15. 4	—	〃	9. 59	99. 1	0. 14	0. 25
	54. 1. 12 11:30	c	—3. 2	1. 2	—	〃	14. 22	103. 8	0. 43	0. 21
(長堤慶下)平	53. 5. 11 14:05	b c	18. 0	11. 1	7. 1	30以上	12. 46	117. 0	0. 26	1. 22
	53. 7. 13 14:10	o	26. 1	17. 8	7. 1	〃	9. 22	100. 0	0. 01	0. 42
	53. 9. 22 12:05	b c	19. 7	14. 8	—	〃	9. 60	97. 9	0. 24	0. 65
	54. 1. 12 11:40	c	—1. 7	1. 6	—	〃	13. 68	101. 0	—	0. 44

第9表 重金属分析結果表（53年5月11日採水）

単位：ppm

採 水 場 所	C u	C d	F e	M n	P b	H g	Z n
吾 妻 橋 下	0.001	N D	0.20	N D	N D	N D	0.01
二 又	0.001	N D	0.09	N D	N D	N D	0.01
大 林 寺	0.001	N D	0.09	N D	N D	N D	0.01
堰 堤 下	0.001	N D	0.23	N D	0.01	N D	0.01

河川および河川周辺の環境は本年は特に7・8月は高温、少雨、多照という条件下にあった。

底生生物・流下昆虫の調査結果は第10・11表にしめし、各地点・各時期とも蜉蝣目、積翅目、毛翅目、および双翅目が出現しているが、二又を境にして優占種の違いが見られる。

二又、吾妻橋下の2地点の河床は砂利・砂質更には泥も少しある状態のため、双翅目が優占している。二又上流の大林寺、堰堤下には、小石・礫質という山間溪流の様相を呈しており、蜉蝣目が優占している。

大林寺における7月13日の流下昆虫の調査では、出現個体数が非常に多かったが、これは、調査直前に上流部で人が歩いていたのではなかったかと思われる。

流量量について3回測定したが、（場所：二又・保護水面内）5月1.03トン／秒、7月0.12トン／秒、9月0.69トン／秒という結果で、7月の水量が少ないのが目立った。

第10表 底生生物調査結果

場 所	月 日	蜉蝣目	積翅目	毛翅目	双翅目	端脚目	その他	総体 個数	湿重量 g	備 考
吾 妻 橋 下	7. 13	個 3	個	個 1	個 24	個	個 25	個 53	0.021	
	9. 22	4			3		16	23	0.046	
二 又	5. 11	12	4	4	14	1	26	61	0.068	
	7. 13	20	2	3	26		18	69	0.095	
	9. 22	7	1	1	2		1	12	0.050	
大 林 寺	5. 11	19	3	4	5		26	57	0.100	
	7. 13	108	5	11	8		14	146	0.388	
	9. 22	12	1	1	2		1	17	0.044	
堰 堤 下	7. 13	84	5	10	7		8	114	0.344	
	9. 22	30	5	4			3	42	0.127	

※ 底生生物採集方法

サーバーネット（25×25cm）を用い1地点で2回づつ採集し、結果はネット1回当りの値で示した。

第11表 流下昆虫調査結果

(サーバーネット25×25cm 3分間採集)

場 所	月 日	蜉蝣目	積翅目	毛翅目	双翅目	端脚目	陸 生 昆 虫	その他	総 体 個 数	湿重量
吾 妻 橋 下	9. 22	個 1	個	個	個	個	個	個	個 1	g
二 又	9. 22				1				1	
大 林 寺	7. 13	92	9	2	6				109	0. 224
	9. 22	1							1	
堰 堤 下	9. 22	1	1		1		1		4	

2. ヤマメの成育・摂餌

53年6月2日・7日の2回にわたって計50,000尾のヤマメが放流されたが、このヤマメを追跡するため7月12日と9月22日の2回、ヤマメの成育状況を調べた。

6月2日放流したヤマメのサイズは、平均体長5.45cm(3.5～5.9cm)、平均体重2.57g(0.68～3.43g)でこれが7月12日には平均体長6.82cm(5.3～8.5cm)、平均体重6.44g(2.96～11.18g)、9月22日には平均体長8.99cm(6.9～12.8cm)、平均体重13.05g(4.91～40.31g)の成育をしめた。

これまでの調査結果では、0オヤマメの成育は主旨平均体長は7～8月に8.0cm、11月に10.0cmに達する値が得られていたが、本年の0オヤマメの成長は、これを下廻る成長で小型であった。この原因については、保護水面内にヤマメ5万尾を放流したため、これまででない高密度状態になったためではないかと思われる。(例年保護水面内への放流は1万尾以下。)

また、老部川における0オヤマメの7月の平均体長6.60cm(平均体重5.22g)及び9月の平均体長7.23cm(平均体重6.73g)と

第12表 ヤマメ摂餌状況

時 間	充満度平均(範囲)	標 本 数
7月11日	9.07 (5.95 ～ 15.27)	8 尾
12	22.32 (10.45 ～ 31.93)	12
1		
2	26.86 (9.45 ～ 43.72)	3
3	10.34 (2.84 ～ 20.65)	4

比較してみると、7月では同じ様な状況であったが、9月は吾妻川における魚体が大きくなっており、後述する様に南股沢へのヤマメの分散が進行して棲息密度が低下し、7月以降の成長が好転したのではないかと推測される。

1, 2才魚(2, 3年魚)の成長について、7月・9月の調査結果をみると、2年魚で体長10cm前後のものが出現しており、河川残

留型（パートタイプ）ヤマメの成長が良くないことがうかがわれる。

また、7月12日採捕した2年魚は雌ヤマメであったが、これまでの調査では吾妻川のサクラマス（ヤマメ）には2年魚以上の雌ヤマメ（パートタイプ）は存在しないとされており、おそらく、河川放流ヤマメの成長のわるいものが、スモルトに変態出来ずに河川に残留したのではないと思われる。

7月12日のヤマメの摂餌状況を充満度であらわすと第12表のとおりで、調査した時間帯の中では、12時から2時にかけて摂餌の増加が見られた。（採捕場所は各時間ごとにまちまちで保護水面内広域にわたる。）

また、このときのヤマメの胃内容物は、蜉蝣目・襀翅目等の水生昆虫や陸生昆虫で占められている。 ※ 充満度＝胃内容物重量／体重×10³

3. ヤマメの性状

吾妻川におけるサクラマス（ヤマメ）については、2年魚以上の雌に河川型（パートタイプ）は存在しない。すなわち、ふ化後1年間は雌雄ヤマメとも河川内にとどまるが、2年目には雌は全て降海し河川内は雄ヤマメのみになるということが明らかにされている。

ただ、最近、吾妻川においては、ヤマメの移殖放流という形での資源添加がなされており、本年も50,000尾のヤマメが保護水面内に放流された。これらの放流ヤマメはその年の河川内ヤマメ資源のかなりの部分を占めているわけだが、これらが、前述の吾妻川固有群と同様の相分化を示すのか、または異なった相分化を示すのかという点について今後の継続調査で明らかにしてゆく必要がある。

本年度採捕したヤマメの外部形態は、背鰭条数12～13軟条、胸鰭条数13～15軟条、腹鰭条数8～9軟条、尻鰭条数11～14軟条、側線鱗数123～141枚、パールマーク9～11、また内部形態では鰾把数16～19、幽門垂数37～51となっており、過年度とほとんど差異は認められない。

4. サクラマスの溯上・産卵

サクラマスの吾妻川への溯上は春（5～6月）で老部川の秋溯上とは異なるが、産卵期は9月下旬からで両河川ともほぼ同じである。

又、主産卵場は保護水面内の二又から大林寺間の区域となっている。

本年のサクラマスの溯上については、5月11日、7月12・13日、9月22日の3回の河川踏査では発見することが出来なかった。（第13表）

また、前年度もサクラマスの溯上産卵は確認出来なかったが、ヤマメ河川放流前の5月11日の調査で保護水面内（取水堰上流）で0才ヤマメを確認したため、サクラマスの溯上産卵があったものと推定される。

本年保護水面内に50,000尾のヤマメが放流されたことにより、保護水面内では例年になくヤマメの棲息数が多いことが確認されており、3年魚として回帰する55年度、更にそれ以降の河川への溯上が期待されるところである。

第13表 サクラマス産卵床分布状況

	A 二又～大林寺	B 大林寺～長慶平	A + B 保護水面	南 又 沢	合 計
昭 47	3 床	2 床	5 床	2 床	7 床
48	5	3	8	1	9
49	(存在すると思われるものの確認するに至らなかった。)				
50	16	2	18	(未 確 認)	18
51	6	(未 確 認)	6	(未 確 認)	6
52～53	(存在すると思われるものの確認するに至らなかった。)				

5. 地先海面のサクラマス漁獲量

鱸ヶ沢地先海面（深浦）においては、主として釣りや定置網によってサクラマスを漁獲しており、その漁期は1～6月で盛漁期は3～5月となっている。

昭和45年以降の漁獲量の推移は第14表のとおりで、本年度は74,180 kgで最も多かった。この年は本県日本海沿岸各地で好漁を呈した年であるが、これは、単に吾妻川の資源保護によるものだけでなく、他の河川も含めたヤマメの放流による資源添加が好影響を与えているのではないと思われる。また、本年度は500 g未満の小型サクラマスの漁獲がこれまでになく多かったのが特徴である。

なお、詳細については、昭和53年度、河川保護水面報告書、青森県水産試験場を参照して下さい。

第14表 深浦におけるサクラマス漁獲量

(単位: kg)

月 年	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	計
昭45	3,581	7,325	8,479	14,347	3,024	15	36,771
46	10,040	10,032	14,014	27,563	4,554	0	66,203
47	4,012	7,773	7,676	26,249	2,562	25	48,297
48	47	2,436	6,608	19,667	6,921	0	35,679
49	101	531	2,685	39,646	15,633	162	58,758
50	1,553	4,451	17,892	30,427	3,712	0	58,035
51	1,540	5,845	9,845	25,398	4,350	25	47,003
52	3,451	2,623	7,840	12,913	12,825	23	39,675
53	5,219.2	17,207.5	14,360.8	26,262.1	11,102.3	18.1	74,180.6

